

安藤喜代美 著

『現代家族における墓制と葬送
——その構造とメンタリティの変容』

(学術出版会, 2013年, 四六判, 260頁, 3,200円+税)

中筋 由紀子

(愛知教育大学教育学部准教授)

本書は、日本の現代家族の変動を、墓制についての意識調査によって明らかにしようとしたものである。著者は、墓制や葬送儀礼について、それらは外面的に観察可能な家族成員の「構造」や「機能」よりもむしろ、その深層にある、家族成員に共有された「メンタリティ」に左右されるものであると位置づける。そして、その変わりにくいメンタリティの部分では、戦後の核家族世帯にも、「日本型近代家族」として捉え直された直系制家族のメンタリティが持続していることを結論づけるのである。

本書は、樹木葬やエンディング・ノートなど、新しい葬送や墓制の現れに着目しがちなこれまでの研究に対して、そうした先端的な部分ではない大多数の意識を考察対象としている。そのため調査分析結果は、変わりにくい深層はやはり変わりにくい、という一見するとあたり前な結論になっているように見える。しかし本書の魅力は、個別の選択肢に対する「意外な」結果についての発見と考察にある。たとえば、3世代家族の方が従来の直系墓に賛成が少ないことや、兄弟数の増加が散骨の賛成傾向を強めることなど、著者の考察とともに大変興味深い点である。そしてそのような魅力的な分析を可能にしたのは、本書のとっている分析方法にあると思われる。詳述しよう。

アンケートによる意識調査は、戦後日本におけるアメリカの標準化された質問紙による調査手法と、統計学的な分析技法の導入とともに発達したが、最初の本格的な実施は、福武直による農村調査においてであったとされる。この時意識調査は農村社会の構造分析と併せて用いられた。すなわち、地主小作関係などの「遅れた生産様式」については質的な聞き取り調査が用いられ、一方、そうした社会関係においては抑圧されている個人意識を調査する方法として、量的な質問紙調査が取り入れられたのである(中筋 2004)。しかし社会関係の一般的な都市化は、個人意識を抑圧していた共同体を解体し、福武のような意識調査と構造分析の併用による農村社会の包括的な調査という組み立ては失効したと思われる。ここに本書の分析方法の新しい意義があると思われる。本書はこうした「むらの解体」後の意識調査の分析単位を、伊藤達也や落合恵美子らの知見から導かれた「人口学的世代」によって、「多産多死」「多産少死」「少産少死」に分かれる世代コーホートに置くのである。世代コーホートが単に歴史的体験を共有しているというばかりでなく、継承によっ

て成立していた従来の家や墓の分析をするうえで、世代間関係を考察できるという利点をもつという点でも、このような分析方法は大変役立つものであると思われる。

最後に今後期待される点について述べたいと思う。1つは、意識調査がかつて福武においては、現実の社会関係に対して未来の方向性を見いだすものとして位置づけられていたのに対して、本書の方法論においては、意識のほうがかつて現実に対して遅滞しているものと位置づけられている。このことは、意識調査が、じつは単一の対象を捉えるものではなく、現実の社会関係から比較的に独立した個人の選好についての調査である場合と、日常生活ではあまり意識されない深層の規範意識を捉えようとする場合とあり、それぞれの分析について異なる方法論が必要ではないか、という点である。もう1つは、本書が「おわりに」で高崎藤村を引用して述べているように、「思い思いの新しい家」を作ったはずが「旧い家を背負って歩いている」という「慣性力の持続」の一方で、かつて「旧い家」を維持するために払ってきた犠牲や我慢をやはり私たちは理解できないのではないだろうか、という点である。本書の中に「意外な」回答として見いだされたいくつかの回答傾向は、こうした深層のメンタリティのゆっくりした変容の方向性を捉えるうえで、重要なものとなるのではないだろうか。

【文献】

中筋由紀子, 2004, 「社会意識論をめぐる一考察」『愛知教育大学研究報告第53輯』163-71.



浜日出夫・有末賢・竹村英樹 編

『被爆者調査を読む——ヒロシマ・ナガサキの継承』

(慶應義塾大学出版会, 2013年, A5判, 319頁, 3,800円+税)

野上 元

(筑波大学人文社会学系准教授)

本書は、原子爆弾の被害者(被爆者)たちを対象にして行われてきた社会調査の歴史を概観しながら、とくにいくつかの調査をとりあげ、共同で「読む」試みである。とはいえ、それは狭義の社会調査方法論、すなわち何か社会調査法としての「正しさ」を求めたものではない。過去の調査がそれぞれ時代条件に制約されながらも、原子爆弾の投下というできごとによどのようによに挑戦していったのかをいわば「追体験」しようとするものである。

もちろん被爆者調査史のマッピングがなされる第1章や、巻末に掲げられた「被爆者調査史年表」はそれ自体貴重な成果である。たがやはり、本書の達成は、むしろこの追体験の質やその提示にかかっているのではないか。1950年代生まれ2人、